

など講読予定である。その他にアーレントやアドルノ、アルチュセールの著作も候補に挙がっている。また、参加者に積極的に個人研究報告もしてもらい、読書会での成果をそれぞれの研究に反映できればと考えている。

## 参考文献

須藤泰秀, 2003年, 『エンゲルス「サルヒト化における労働の関与」を読む』鶏鳴出版.

## 社会政治研究会

名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程

中根 多恵

2009年5月7日に、名古屋大学で第1回社会政治研究会 (Social Politics Forum) が開催された。大岡頼光 (中京大学)、上村泰裕 (名古屋大学)、田村哲樹 (名古屋大学)、山岸敬和 (南山大学) ら、若手の社会学者や政治学者を中心に、今回はじめて開かれた研究会である。

遠方の大学も含めた11大学、さらにはNPO団体からの参加もあり、出席者の所属は非常に多様であった。また、専門分野別にみると、社会学系18名、政治学系16名、その他3名の計37名であった。「社会政治研究会」という名のとおり、社会学的次元からのベクトルと政治学的次元からのベクトルが向き合った、その中間点での学問的考察の共有を目指したともいえる今回の研究会は、有意義かつ斬新なものとなった。

第一報告は、名古屋大学法学部の田村哲樹先生による《ベーシック・インカム、自律、政治的実行可能性》である。「ベーシック・インカム (以下BI) はいかなる「自由」を保障するのか」という問題提起に始まり、パレイスの「真の自由論」より、BIが保障すべき自由は「自律としての自由」としたうえで、一方、「その自由/自律は、個人主義的にのみ達成可能なのか」という点の見直しから、「民主主義のためのBI」という田村先生ならではの視点が導入された。さらにBIの実行可能性について、「政治」の観点から検討するという「政治的実行可能性」についての試論が提示された。

報告後の議論では、「具体的な政策を行う主体は誰なのか」「現行制度と併行するかたちでのみ導入可能なのではないか」「BI導入に要する年数ほどのくらいか」など、BI導入の具体的な政策論議をはじめ、フリードマンの負の所得税との関連性、BI制度と共産主義の相違点、またBI導入によるソーシャルワークの意義の消失についてなど、多様な論点が提起された。

しかし、最も印象深かったのは、「民主主義」の理解に関する議論である。『熟議の理由—民主主義の政治理論』(勁草書房、2008年)等の著者である田村先生ご自身の考察を拝聴できたことは、筆者のみならず参加者全員にとって貴重な経験だったに違いない。民主主義のためにBIを導入することへの疑問に対して、田村先生は「民主主義は問題解決の一つの手段」と述べ、あくまで「共通理解づくりのための民主主義」を強調された。

続く第二報告、中京大学現代社会学部の大岡頼光先生による《死生観と老人介護——ス

ウェーデン高校生へのインタビュー調査から》は、大岡先生ご自身の体験から生まれた「日本における身内の老人介護の不可避性」に対する疑問をきっかけに行われた。墓や介護における社会の責任の有無について問うたスウェーデン高校生へのアンケート調査、死や墓、先祖への意識を問うたインタビュー調査、また、匿名墓に垣間見られる人々の先祖や墓への意識調査などを通してスウェーデンと日本を比較し、死生観や公的老人介護の根拠を分析したものである。

興味深かったのは、両国の老人介護、先祖や墓、そして死生観そのものに対する意識の違いをみることで、「すべての人を尊ぶ普遍主義」のスウェーデンと「身内のみを尊ぶ個別主義」の日本との対照が明らかになるということである。また、報告後の議論では、宗派の違いが、仕事の意義や国家の役割に関する意識に影響を及ぼし、現在のワークフェアの違いをも説明するという調査結果は、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』にもつながる面白さを感じさせるとのコメントもあり、非常に印象的であった。一方、スウェーデンでのアンケート回答者の男女比が極端に偏っていることから、性別と、墓や介護における社会の責任への意識との間に関連があるのではないかと、との指摘もあった。大岡先生の報告は、調査対象そのものが非常に興味深かったこともあり、参加者自身の経験や研究テーマと関連させたコメントも多く出された。

今回の研究会で最も意義深かったことは、所属や専門分野を異にする研究者が集い、テーマについてさまざまなベクトルを向け、議論したという点であったように思う。上村先生の応用社会学セミナーでも、山森亮『ベーシック・インカム入門』（光文社新書、2009年）をもとにBIについて議論してきたが、今回の新たなベクトルの導入により、セミナーで議論したことの社会的意義を再確認すると同時に、社会学とは違う次元からの考察にも触れることができた。今後も多くの参加者を巻き込んで、さらに多様かつ自由な研究会に発展することを期待したい。



(左から山岸敬和、大岡頼光、田村哲樹の各氏)